

『旅の空の下で』リメイド

デルフト市 (Delft)



写真1 デルフトの街並み

ヨーロッパのやや北よりに、北海に面してある海洋国家オランダ。その中心の一つ南ホラント (Zuid Holland) 州のほぼ真ん中に、幾重にも掘割がぬい、それに沿ってレンガ建ての家並みが続く典型的なオランダの小都市、デルフトがある。ここは有名なデルフト陶器の産地だが、遠く16世紀にこの国がスペインの圧政に抗して立ち上がった時その拠点となり、以来多くの歴史を刻んで来た古都である。初めてオランダを訪ねた時、最初に降り立ったのがこの街だった。

1985年の夏8月、3週間程の旅程で東西欧州を巡った時、パリからベルギーのフランドル地方を經由して、初めてオランダに入った。列車での入境でデルフト駅に降りる時、両替ができるかどうか心配だった。しかし閑散とした駅前に出てみると何のことはない、ちゃんと銀行があつて、旅行者用小切手を通貨のギルダーに交換することができた。旧市街は南北にやや細長く、駅はその南西の隅近くに位置していた。まずは街の情報を得ようと、外周道路を横切り掘割の街の中へ歩いて行った。水掘に円弧を描いて跨ぐ橋をいくつか越え、菩提樹が水面に木陰を落とす運河沿いを歩くと、急に視野が開けた。ちょうど新教会の尖塔が聳え立つ街の中心、マルクト (Markt) 広場に出たのだ。ここには街の観光案内所がある。早速地図付きのパンフ

人口85,000人 ネーデルラント(オランダ)王国

を買って、安宿さがしに出かけた。

交通の便が悪ければ安い部屋があるという鉄則に従って、駅から遠い東側の旧市街をパンフ片手に歩く。ところが、それまで晴間も見えていた天气が急変し一時突風が吹いたかと思うと、急に雨がふり出した。慌てて街角のドラッグストアに飛び込み雨をしのいだ。しばらくして雨勢が弱まり空を見上げると、にわかには湧き立った灰色の雲が東方に過ぎ去って行く。雨は天気雨だったのだ。オランダの風景画を代表するヤコブ＝ロイスダール (J. Ruisdael) の絵画には、いつも決して晴れ上がることのない空に雲わく光景が描かれている。この景色はロイスダールの絵そのものだと思った。雨宿りさせてもらったので、使い捨てかみそりを買ってそこを出た。巡り歩いて結局先程のマルクトに戻って来ると、広場に面した一面にダルマチア (La Dalmacija) という名の宿があり、幸い空いていたのでこの便利な場所に落ち着く事にした。フロントの男性のスラヴ系の顔つきから、この経営者がユーゴスラヴィア (現クロアチア) のダルマチア地方の出身者であることが想像された。

東西に長いマルクト広場の東には、1381年建立の新教会が正面を西に向けて巨大な軍艦の様に横たわっている。会堂の中に入ると、ゴシック様式特有の人を威圧するような石造の列柱を仰ぎ見ることができた。両側の縦長の窓に嵌め込まれるはずのステンドグラスが無く、どの窓もただの乳白ガラスに覆われている。さすが偶像を欲しない、福音主義カルヴァン派新教の国だなあと、感心した。

この何の飾り気も無い会堂の正面奥に、1カ所だけバロックの彫刻を施した大理石のモニュメントがある。オラニエ公ウィレム (Willem van Oranje) の墓だった。ウィレムはスペインからの独立戦争が始まった時、このホラント州



写真2 新教会とグロティウスの立像

の総督だった。彼は国王フェリッペ2世の軍と戦う先頭に立ち、カトリックの南部ネーデルラント（現在のベルギー）が離脱した1579年、ユトレヒト（Utrecht）同盟によって北部のカルヴァン派新教徒をあくまで独立の線に結集させた。

ウィレム自身は戦争中に暗殺されるが、新教国オランダはその後スペイン無敵艦隊の敗北もあって1609年には実質独立することになる。戦争中、周囲を深い沼地や河川に囲まれ外周に厚く頑丈な城壁をもった要塞都市デルフトは、恰好の作戦司令部になった。ウィレムもこの街に住み、近くのプリンセンホーフという館に居を構えていた。1584年、そこでフェリッペの送った刺客によって倒されたのである。建国のそして悲劇の英雄という訳である。

ひんやりとした会堂から外に出て広場の中央まで来ると、ここに集う鳩たちの糞に悩まされている哀れな紳士の立像と対面した。この街が生んだ高名な学者ヒューゴ＝グロティウス（H. Grotius）の像である。ウィレムの遺志を継いだ新生国家オランダは厳格なカルヴァン主義を奉じる一方、宗教に寛容で自由を貴ぶ市民達が活躍する連邦となった。そんな市民層の中から

グロティウスは出て来た。一度前者のカルヴァン派新教徒と後者の寛容派が対立した時、彼はその犠牲となって近くの城に幽閉された。この時妻の機転で、牢屋から運び出された書物の収納箱に身を屈めて隠れ、見事脱出に成功した。以降、祖国を離れて生涯異邦人として暮らしたが、折からのドイツ三十年戦争の悲惨さに思いを致して各国間の平和を求めた彼の思想は、『戦争と平和の法』という本に結実した。「国際法の父」と敬称されている。第一次大戦後の国際連盟設立以来、北隣の行政都市ハーグ（Den Haag）に国際司法裁判所が置かれているのは、この彼の功績によるものだ。この街の宗教センターである新教会を背にして立っているのは、その宗教的不寛容を戒めている様にも見えた。

この日は早々にデルフト観光を切り上げ、列車に乗って近くの大学都市ライデン（Leiden）を往復した。どこに大学があるかも知らず街をうろつき、ふと入った中華料理屋で地元の新聞に目を通すと、一面に大きく山中に激突した航空機の写真とYumi Ochiai と表記されたステューワーズの顔写真が載っていた。日航機の大惨事は、こんな遠い異国でも報道されていた。

デルフトに戻って来た翌朝、朝の散歩に出た。南北に貫流する掘割の一つに沿って歩くと、その南端近くに歳月を感じさせる地味だが大きい館が目にとまった。正面にVOCのイニシャルが着いた紋章が掲げられていた。ここはかつてのオランダ東インド会社の六つの「会議所」の一つで、海外貿易が盛んだった往時の姿を残す建物だ。この近く街の南端から南へ走るスヒー河を下ると、ラインの支流マース河への出口デルフトツハーフェンに至る。今は大都市ロッテルダム（Rotterdam）の一部だが、この港で積み替えられて多くの物資が海外と取引されたのである。中でも17世紀の日蘭貿易で取引された柿右衛門ら古伊万里の色絵磁器は、イタリアの陶工が齎（もたら）した陶器をいわゆるデルフト・ブルーの東洋趣味に変えた。デルフト陶器が有名になったのは、これ以降のことである。17世紀

後半イギリスの「航海条令」発布により、その中継貿易品をイギリスの港から排除されたオランダだったが、自前の製品を輸出できたデルフトの繁栄は続いた。オランダの衰退期にも、この街の繁栄は変らなかったのだ。そのことがこの街に余裕と落ち着きを与えているようだった。

運河沿いの散策を終えてマルクトに戻ると、広場には果物市が立っていた。オレンジを一つ買おうとすると、10ギルダーだと言う。考えずに出した紙幣の代わりに袋一杯のオレンジがあてがわれた。この国に入って二日目で、ギルダーの価値（当時約80円/1ギルダー）を十分自覚していなかったから仕方がないが、何だか騙された気分だった。それからこの町を後にしたが、列車の道中食べ続けたアルゼンチン産マンダリンの味はとりわけ美味で、この損したと思った取引のことを忘れさせた。

それから十年近く、旅の途上でアムステルダムに立ち寄ることはあったが、デルフトを再訪する機会は与えられなかった。しかし、この街のしっとりとして落ち着いた雰囲気は忘れがたく、デルフト出身でこの街の市井の人々を描いた画家ヤン＝フェルメール（J. Vermeer）の絵など見る機会があると、またぜひ訪ねたいと思うことがしばしばだった。そしてそれは、KLMオランダ航空を使ってまだ赤ん坊だった長男を連れて、三人でドイツに行くことになった96年春に実現した。ちょうど、大規模なフェルメール展がハーグで行われている時だった。

96年3月、学校が春休みに入るとすぐにアムステルダムに旅立ち、そこでハーツ社の車を借り出し、オランダから北西ドイツ・ルクセンブルク・ベルギーと時計周りに進み再びオランダに戻る一週間強のドライブ旅行に出た。4月1日、北海を望むベルギー・フランドル地方の海浜リゾートから観光都市ブリュージュを経て、再びオランダに入った。旅は残り後二日、最後の日に余裕を持ちたいと思って連泊するつもりで、アムステルダムの空港にも遠くないこのデルフトを目指した。高速道路A-13のデルフト南



写真3 『デルフトの眺望』 J.フェルメールを降り、そのまま都心を示す標識をたどったが、運河を跨ぐ跳ね橋を渡った所で、一方通行の小路に迷い込んでしまった。右に左にと曲がったので方向感覚までおかしくなった時、見覚えのある新教会の尖塔が仰角の視野に飛び込んできた。石畳の道沿いにはあの堀割も見える。通りかかったジーンズ姿の青年に確認すると、確かにデルフトの都心だと言う。それで一安心して、後は車を堀沿いに徐行させながら宿を探した。

その昔穀物市場があった通り (Koornmarkt) を行くと、直ぐにホテルを見付けたので、堀側に車を寄せてフロントで聞くと、連泊できる部屋があるという。問題は車の夜間駐車が可能かどうかだったが、幸い棟一つ置いてその穀物市場跡が駐車場だという。それで迷わず、このホテル・レーヴェンブルク (Leeuwenbrug) にチェック・インすることにした。4階の屋根裏部分を利用した部屋に入ると、突然、時を告げる新教会のカリオンが響いて来た。窓外を見ると正面右側にあのゴシックの尖塔が夕刻の薄暮の中にライトアップされて浮かび上がっていた。その下方に煉瓦の家々が静かにたたずんでいる。旅情をかきたてるその光景を喜んだものである。

翌4月2日、ホテルのロビーでコンチネンタルとしてはやや豪華な朝食を楽しんだ後、外出する段になり駐車場に出掛けた。そこで同じホテルから出て来たパリ在住の英国人女性と話す機会があった。フェルメール展の話に及ぶと、その老婦人は私も展覧会に行くが今日の午後入

場指定の券が2枚余っているので差し上げましょうという。それが大変な盛況で入場券は手に入らずと聞いていた私達は、突然の話に驚いて遠慮がちにしていた。すると私達に切符を押しつける様にして、その女性は去って行った。結局それを有り難く受け取ることにして、午前はライデンにそして午後はその帰りにハーグのフェルメール展を見て戻って来ることにした。その前に街の郵便局に出掛けて船便で日本に別送品を送る手続きをした。郵便局の近くには新教会より一回り小さいこの街の旧教会が立っている。時間をこしらえてそちらにも寄ってみた。ここで特記すべきは、菊の花に飾られたフェルメールの墓があったことだろう。墓碑にはデルフトで生まれデルフトで死んだ彼の生年、1632-75年が記されていた。

再び出掛けたライデンの街では、国立民族学博物館を訪ねた。その日は雪が降ったり止んだりするあいにくの天気だったが、だからこそたどり着いた博物館の中は暖かく快適だった。ところがお目当てのシーボルトの日本コレクションは借り出されてしまい、我々にもなじみの薄い江戸時代の根付け細工のコレクション位しか見ることができなかった。そして午後のハーグのフェルメール展だが、こちらの方は寡作だった作家の作品の2/3が展覧されるという大イベントで、小さな美術館マウリッツ・ハイスはその裏の掘割に大きな水上デッキを用意して、その上に仮設のテントをはり、まるでお祭りに来たと覚しき入場者のサービスにあてていた。肝心の展覧会場は人息れのする程の混みようで、それでも楽しみで来ていた私達はともかく、ベビーカーに座ったまま付き合わされた二歳にもならぬ息子にとっては疲れただけの経験だろう。絵画に堪能したと言うよりもむしろ、ヨーロッパ人の美術展までお祭りにしてしまう活力に驚いた経験だった。帰りの高速道路はイースター休暇の渋滞に出会ったせいか、なかなか前へ進めなかった。どこがデルフトの降り口かと探していたら右前方に黒褐色の新教会の塔が

見え、この街にまた戻って来たことが分かった。高さ105mもあるその塔は、今でもランドマークとしての機能を果たしているのだった。

前の晩は掘割沿いのレストランで洒落てみたが、この晩は歩いて見付けた駅に近いトルコ人経営のファースト・フード店で、シシカバブーとポンフリ(フライドポテト)という簡単な食事で済ませた。夜の街を再び歩きまたマルクトに出た。10年以上前この広場にあったユーゴ人経営のあのホテルは、建物を土産物屋に譲りなくなっていた。それを確かめた後、掘割の水面に揺れる光を楽しみながらホテルへと帰った。

4月3日、旅の最後の日、朝食を食べてロビーを引き上げる時、壁に掛かる一枚の写真に目が行った。それはホテル前の掘割が結氷し、市民がスケートを楽しんでいる景色だった。脇のカウンターにいた青年に実際この様になるのかと聞くと、毎冬1月から2月にかけてはこのとおりになるという。オランダがスケート王国とは聞いていたが、なるほどなあとその種明しをされた思いだった。そう言えば、ネーデルラントの画家達がスケートをする市民を描いた風景画を残しているなあと思い出しました。



写真4『スケーターと冬景色』P.ブリュエル
時間があれば更に何日かここに滞在していたいが、それもままならず私達はホテルを後にして旧市街を出た。車の背後にはフェルメールの「デルフトの眺望」という絵に描かれた街の東門が、17世紀同様の姿で今日も道行く人を見下ろしていた。そこからアムステルダム・スキポール空港までは、一時間とかからなかった。